

先人の足跡 8

— 祖国独立への留魂 —

インド建国とチャンドラ・ボース

教育問題プロジェクトチーム

和田 昭 陸士60

インドが2百年近くの英国植民地支配から1947年8月15日に独立して、今年は70年目の節目の年に当たります。

独立に決定的な貢献をした偉人がおられます。スバス・チャンドラ・ボースです。インドではボースをネタジと呼んでいますが、これは偉大な指導者を意味する尊称で、特にボースを指しています。

●東京杉並区の蓮光寺とボース

筆者がチャンドラ・ボースに特別な関心を持つようになったのは、居住する東京杉並区と同じ町にある蓮光寺という寺院に、戦後ボースの遺骨が奉安され、毎年8月18日の命日には欠かさず法要が営まれており、参列させて頂くようになったからです。

蓮光寺にはインドから昭和32年(1957年) ネール首相が参詣されて「仏陀の使命が人類の平和をもたらすように祈ります」と署名し、昭和33年(1958年)にはプラサド大統領が参詣され、「当寺に参つてネタジの聖なる遺骨にお祈りを捧げる事は私の幸

福とするところであります」と署名しております。また昭和44年にはインディラ・ガンジー首相が参詣され、平成13年にはバジパイ首相が参詣され「インドの偉大な自由の闘士ネタジ・スバス・チャンドラ・ボースの霊を安置している蓮光寺を再び訪れることが出来て嬉しく思います」と署名しております。

遺骨が蓮光寺に奉安されるようになった経緯ですが、日本の敗戦直後のことでした。8月17日ボースは日本の爆撃機に便乗し、サイゴンを発つて大連に向かいました。戦後はソ連が英国に敵対して独立運動のバックになることを期待し、ソ連が占領した満洲へ向かおうとしたのでした。

翌18日、台北の松山空港に寄り、燃料の補給と機体の整備をして離陸した直後に事故は起きました。左のプロペラが跳び、エンジンが火を吹いて機は右に傾き墜落炎上しました。ガソリンタンクの傍の座席にいたボースは全身大火傷のため、陸軍病院で48歳の生涯を終えることになりました。

遺体は火葬にされ、東京に運ばれた遺骨は9月7日日本陸軍当局からインド独立機関の責任者ラマ・ムルティ氏に手渡されました。

当時、東京荻窪近辺にはインド独立の志士が住んでいて、遺骨の奉安と葬

儀の受け入れ先につき寺々を探しましたが、米軍進駐直前の東京でそのような寺院が見当たりません。こうした中で唯一蓮光寺の望月教栄住職は「霊魂に国境がないのみならず、死者に回向する事は仏法に従事する僧侶の使命である」として即時快諾しました。葬儀は9月18日、100名近くの参列者を得て挙行されました。

蓮光寺では以来毎年8月18日の命日には法要が営まれ、2代3代住職へと慰霊の行事が現在まで続いております。

●チャンドラ・ボースの生い立ち

彼はインド東部ベンガル州の名家に生まれました。カルカット大学から英国のケンブリッジ大学に留学し、インド人としては特に難しい公務員試験に合格しましたが、彼は敢えて出世への道を捨てて独立運動に身を投じました。彼の人望は多くのインド民衆の心を惹き付け、33歳の若さでカルカット(現コルカタ)市長に選任され、41歳でインド最大の政治団体である国民会議派の議長に就任しております。

しかし彼は会議派の長老であるガンジーの「非暴力、非協力」の路線を採らず、支配者英国に対し「行動と武力と積極」を旗印としなければインドの独立は遠い先に行ってしまうだけだと強く主張して、対立しました。

彼はインド各地に建てられた英国のモニュメント・記念碑・銅像などの撤去を実力行使に訴えたため、検挙投獄は11回に及びました。獄中で彼は断食をし、衰弱が進みます。そのため一時的に仮釈放となり、救急車で自宅に運ばれました。

●ボースのインド脱出

1941年(昭和16年)1月17日夜、ボースは甥のセシル・ボースの運転する車で脱出しました。途中から徒歩となり、カルカットからベシャワール、アフガニスタンのカプール、ベルリンと70日間の逃走でした。

ドイツは当時英国と交戦中でしたので、独立運動がすすめやすいと判断したので、ドイツではヒトラー総統の著作で、ナチスの教典とも言うべき『我が闘争(マインカンフ)』が広く読まれておりました。ヒトラーは偏執的に自分らアーリア民族の優越性を強調する独裁者で、有色人種を蔑視しておりました。

ボースはヒトラーとの会談でまず、



チャンドラ・ボース
出典:チャンドラ・ボース・ア
カデミー編『ネタジと日本人』

「我が闘争」第26章に書いてある「インドに独立成功の見込みはない。独立などイギリスが倒れたら初めて出来ることだ」との箇所を衝き、書き換えを要請しました。ヒトラーは一寸肩をそびやかしただけで返事をしません。それでは「インド支援の声明」だけでもと求めましたが、冷たくあしらわれました。

やがて大東亜戦争が開戦し、1942年2月、日本軍はマレー半島を南下しシンガポールに向かって進撃しました。その間、藤原岩市少佐を長とする藤原機関（F機関）の工作により英印軍の多くのインド兵が投降し、インド国民軍（INA）として日本軍に協力するようになりました。ポースは居ても立ってもいられません。軍隊を持って独立への戦いを進めることが絶対必要とは、彼の信念であったからです。

当時既に、インド独立連盟の会長として日本で活動していたビハリ・ポースから日本政府への強い要請もあり、日独両政府の了解が成り立ちました。ポースは、1943年（昭和18年）2月8日、キール軍港を潜水艦Uボートで出港。連合国制海権下の大西洋を南下してアフリカ南端の喜望峰をまわって、79日間をかけて4月28日、マダカスカル島沖で日本のイ号潜水艦と落ち合い、乗り換えます。更にインド

洋を渡りスマトラ北端の島に上陸、飛行機で東京に着いたのが5月16日、ドイツを出てから98日間の危険な旅でした。

ポースは東京に到着した折、ラジオを通じて日本国民に語りかけました。その一部を紹介しましょう。自分が小学生の頃、日露戦争で日本が勝利した時の感激が大きかったことを述べた後、「日本はこの度、インドの仇敵イギリスに宣戦しました。日本は私たちインド人に対して、独立のため絶好の機会を与えました。私たちはそれを自覚し感謝しています。一度この機会を逃せば、今後百年以上訪れることはないでしょう」

ポースはこの後シンガポール（当時昭南市）で、数万のインド国民軍を結成し、総司令官に就任します。

●大東亜会議に参加

大東亜会議は1943年（昭和18年）11月5日、6日に当時の帝国議会議事堂、現在の国会議事堂を会場として開催されました。世界で初めて開催された「アジアサミット」でありました。各国代表は日本・東條英機総理大臣、中華民国（南京政府）・汪兆銘行政委員長、タイ国・総理大臣代理ワンワイタヤコン殿下、満洲国・張景惠國務総理、フィリピン国・ラウレル大統領、ビルマ国（現ミャンマー）・

バー・モウ総理の6カ国とオプザーパー参加として自由インド仮政府、チャンドラ・ポース首班の7人でした。

この会議で参加国は五つの原則を世界に向かって示し、宣言しました。その要旨は次のようなものでした。

- ① 各国の共存共栄を目的とする。
- ② 相互に自主独立を尊重する。
- ③ 各国の持つ伝統と文化を尊重し発展させる。
- ④ 相互の経済発展により全体で繁栄を図る。
- ⑤ 人種差別のない国家間の交流を通して世界全体の繁栄を願う。

この共同宣言は東條議長から提出された。議案として満場一致で採択されました。

会議中、列席者に最も強い感銘を与えた演説の一つは、二日目のインド代表チャンドラ・ポース首班のものでした。「アジアの一国日本が1905年日露戦争に勝利した時、私は幼少でしたが、インドの同胞が如何に歓喜と熱情を注いだか、今でも記憶に新しいものがあります。以来アジア民族は結集して、自由なるアジアの実現を夢見てきました」そして、インド国民軍の将兵がインド国内に進軍し、独立のため血を流して戦う決意であることを、次のように述べました。

「私の胸中には、国境あるいはインドの平原で戦う戦闘の情景が彷彿と浮かんでくるのです。我がインド国民軍は来るべき戦いにどれほど生き残るか予想出来ませんが、我々の重大関心事はインドが自由を獲得し、米英の帝国主義を排除することであります」

ポースは、翌春の日英両国間のインド国内の戦いであるインパール作戦発起を、心中既に想定していたと言えるでしょう。

●日本軍のインパール作戦とポースのインド国民軍

ビルマ現地の第5軍司令官牟田口廉也中将は、翌年3月8日インパール作戦を発動しました。

- ① 英印軍のビルマ侵攻の拠点となるインパールを抑える。
 - ② ポースの指揮するインド国民軍のインド進攻を支援して独立運動を押しすすめる。
- この二つが作戦の目的でした。日本軍の目的はまた、あくまで英軍の殲滅でしたから、占領したインド領土は、直ちにポースの自由インド仮政府の支配に移すことにしました。ポースは長年この日の来るのを待ち焦がれていましたので大変な喜びでした。作戦は初め順調に進み、目的とするインパール近くのコヒマの一部を占領するに至りました。インド国民軍の士

気は日本軍に劣らず燃えていました。日本軍との連絡機関である「光機関」の隊員とインド国民軍が連携し、作戦が効果的にすすめられたケースもありましたが、弾薬食糧等の補給がほとんど尽き、折から豪雨続きの雨期に入っマラリア、デング熱の流行に悩まされました。しかもアメリカから送られた豊富な新鋭兵器に恵まれた英印軍の機械化師団・空軍の逆襲にさらされ、やがて悲惨な退却となりました。

日本軍は8万の兵が出撃し、戦死3万、傷病者は数万に上りました。インド国民軍は出撃6千人のうち、4百人が戦死、戦病死・行方不明者等を除き、残存2千6百名となりました。悲惨な敗退を経て、大本営は7月12日、作戦の終了を命じます。

大東亜戦争では大きな失敗作戦として、「インパール作戦」は、「ミッドウェイ海戦」「ガダルカナル島戦」と共に、3大愚戦と言われております。結果的にはその通りでしょう。

●歴史の評価とは

しかしながら、インパール作戦に対するインド側の評価には、違った面のあることも注目する必要があると思います。

「インパール作戦があったからこそ、インド国民軍は自分の国土の中で独立戦争を戦うことが出来たのではない

か」「だからこそ、戦後直ちに行われたインド国民軍裁判で、インド全域が立ち上がり抵抗運動が燃え上がったのだ」そしてつまるところ「この抵抗運動があったからこそ、英国もインド支配を諦めてしまい、インド独立に結びついたので」と理解されているのです。

1945年（昭和20年）11月5日、第1回裁判の開始が決まるや、デリー、カルカッタ、ラホール、マドラス等の都会で大抗議集会が開かれます。法廷での弁護団の論法は、理路整然として一歩も引きません。要点を次の四つにまとめます。

国者を救え」「インド国民軍全員即時釈放を」新聞もラジオも大キャンペーンです。やがて各地で流血のゼネストに発展し、カルカッタだけでも数百人の死傷者に達しました。人々は争って法廷のあるデリーのレッド・フォートに殺到し、英軍は遂に機関銃を掃射して市街戦並みとなりました。

●インド国民軍裁判からインド独立へ

8月15日、日本敗戦後、英国として

① 自由インド仮政府は、日本・ドイツ・タイ国等7カ国から承認された

12月30日第1回軍事裁判が終了し、判決は「無期流刑に処す」でしたが、英国はインド民衆に対する衝撃を恐れて発表を避けました。そして明くる1

は日本側について英国王に反逆したインド国民軍を処罰する必要があるとしました。終戦時インド国民軍は1万9千5百名いましたので、全員を一度に裁判することは困難です。そこでヒンズー教徒、イスラム教徒、シーク教徒の上級士官から1名ずつを選んで3人を軍事裁判にかけました。法廷は「赤い些（レッド・フォート）」という、英国にとつてインド支配の象徴的な場所が選ばれました。裁判を通してインド人が二度と英国に逆らえないように押さえ込んでしまう予定でした。

② その合法政府が、国際法に基づき、英国に宣戦布告したのだ。

3月3日「判決は正当と認めるも、総司令官の権限において刑の執行を停止する」と発表、釈放を宣告しました。1946年2月7日、英国はニューデリーで「対日戦争勝利祝賀パレード」を計画していました。1万5千人の英軍・米軍の行進予定です。ところが市民はこれをボイコットしました。どの家も巾旗を掲げ、商店・工場・学校が休業し、数万の市民が抗議のデモに押し掛けました。

③ インド国民軍の兵士は、シンガポールで日本軍に接収された時点で、英国王に対する忠誠義務から解放されている。彼らは自由意志で国民軍に参加し、祖国インド独立のために戦った愛国者なのだ。

④ インドに進撃した彼らは、アメリカ独立戦争とどこが違うのか。フランスの支援を得て英国の搾取から立ち上がったように、われわれインド国民軍は、日本の支援を受けて戦ったのだ。

かくして、70年前の1947年（昭和22年）8月15日、2百年に及んだ英国植民地支配の鎖は断ち切れ、インドは遂に独立宣言をすることが出来ました。

ところが、インド国民軍が血を流してインパール作戦で戦った実績が、インド人の心を目覚めさせていました。

同じ時期、比較されますが、日本では、占領軍マッカーサー司令官による極東軍事裁判が開廷されようとしていました。

●インド遂に独立

●むすび

インドでは裁判の進行と共に、「愛

英国のインド撤退については、当時

英国の首相であったアトリー氏が後年（1956年）、インドのベンガル州を訪問したときのインタビュ어가残っております。

「今次大戦で連合国は勝利を収めました。枢軸側は完敗して、当時英国が引き続きインドを統治することに各国とも反対がないときに、なぜ早急にインドから撤退したのですか」

アトリー元首相は当時を偲ぶ表情で極めて率直に以下の通り答えています。

「英印軍インド兵の、英国人指揮官に対する忠誠心が、チャンドラ・ボースのやった仕事のため低下したということです」

「ガンジীর非暴力運動の方は、どれ程、英国の撤退に影響を与えましたか」の問に対しては、「ごく僅かです」との回答でした。

チャンドラ・ボースは、インド国民軍の総司令官として、日本軍と共にインパール作戦を戦った戦友でした。大東亜戦争が敗戦となり、台北での飛行機事故による死亡で、インド独立の夢は生前には実現しませんでした。しかし彼の自由と独立への強い意志は、2年後のインド国家独立へと更に繋がったことは確かでしょう。インド独立はその後、中近東・アフリカの各種民地に次々と影響が及び、戦前40数カ国だった世界の独立国が、現在では19

0カ国以上となっていることを思うとき、チャンドラ・ボースの精神は、全人類的に評価されてよいのではないのでしょうか。

それと共に「歴史の真実とは何か」を改めて考えさせられます。

【参考資料】

- ・チャンドラ・ボース・アカデミー編 『ネタジと日本人』
- ・名越二荒之助編『昭和の戦争記念館』
- ・藤原岩市『F機関』
- ・国塚一乗『インパールを越えて』
- ・林田達雄『悲劇の英雄 チャンドラ・ボースの生涯』

教育問題PT講演会の案内

・時期 平成29年11月10日（金）

15・00～17・00

・会場 偕行社3階会議室

・テーマ 「多極化する世界と日本の針路」

・講師 中西輝政先生

1947年大阪生まれ

京都大学法学部卒業

英国ケンブリッジ大学歴史学部大学院（国際関係史専攻）修了

京都大学大学院・人間環境学研究所教授などを経て、2012年4月より京都大学名誉教授。